

2020年1月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

パセーナディ王の帰依

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含経典』（ちくま学芸文庫）／詩（偈）のある経典群／拘薩羅相應／1 若しとて

(2) 主題

釈迦牟尼世尊とコーサラ国のパセーナディ王の出会いを通して、釈迦牟尼世尊のみ心をたずねてみたいと思います。

2. 二つの大国

(1) コーサラ国

釈迦牟尼世尊と同時代、ガンジス川をはさんで、二つの大国が対峙していました。そのひとつが、ガンジス川北岸のコーサラ（拘薩羅）国です。首都はサーヴァッティー（舎衛城）、国王はパセーナディ（波斯匿）です。

阿含経の「拘薩羅相應」は、釈迦牟尼世尊とパセーナディ王との親交を綴った経文群です。

(2) マガダ国

ガンジス川の南岸の大国が、マガダ（摩訶陀）国です。首都はラージャガハ（王舎城）、国王はビンビサーラ（頻婆娑羅）です。ビンビサーラ王は、コーサラ国パセーナディ王の妹を正妃としていました。

ビンビサーラ王は、釈迦牟尼世尊とその教団を保護し、釈迦牟尼世尊とも親交が篤かったと伝えられています。

3. 出会い

(1) 経文「若しとて」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、コーサラ（拘薩羅）国の王パセーナディ（波斯匿）は、世尊を訪れ、世尊と丁寧な挨拶のことばを交して、その傍らに坐した。（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 381）

(2) 出合い

コーサラ国のパセーナディ王と釈迦牟尼世尊の初対面です。

パセーナディ王は、妃や家来たちから釈迦牟尼世尊の話を聞いて、どんな男か確かめるつもりで、祇園精舎を訪れたように思われます。

森 章司先生によれば、二人は同年配で、祇園精舎で出会ったのは50歳ごろと考えられるそうです。

(3) 祇園精舎

コーサラ国の舎衛城に、長者スダッタ（須達多）がいました。スダッタは、アナータピンディカ（孤独な人々に食を給する資産者、給孤独(ぎっこどく)長者）と呼ばれていました。

あるとき、スダッタは、マガダ国の王舎城に住む、義弟（妹の夫）である長者を訪問しました。そのとき、はからずも、釈迦牟尼世尊と面会することができました。

釈迦牟尼世尊の教えに感動したスダッタは、舎衛城においでくださいと懇願します。釈迦牟尼世尊は、雨安居(うあんご)の施設があることを条件に、舎衛城に行くことを約束します。

舎衛城に戻ったスダッタは、ジェータ(祇陀)王子の林を買い受け、そこに精舎を建てました。この精舎は、「ジェータ(祇陀)林なるアナータピンディカ(給孤独)の園」、漢訳では「祇樹給孤独園(ぎじゅぎっこどくおん)」と呼ばれました。これが、祇園精舎です。

このエピソードから、祇園精舎が建てられたのは、釈迦牟尼世尊が成道なさってから、しばらく後であることが推測できます。

3. パセーナディ王の質問

(1) 経文「若しとて」

傍らに坐したコーサラ国の王パセーナディは、世尊にいった。

「世尊よ、あなたは、最高の正等覚を悟ったと宣言なされますか」

「大王よ、もしこの世に最高の正等覚を悟ったと語りうる者があるとするならば、それはわたしである。大王よ、わたしは最高の正等覚を悟ったのである」

(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.381)

(2) パセーナディ王の質問

パセーナディ王は、釈迦牟尼世尊に、ずばりと質問しました。

「あなたは、ご自分が、最高の正等覚を悟ったと宣言なさいますか」

パセーナディ王は、まわりの人々から、釈迦牟尼世尊は正等覚を悟った方だと聞いていたのでありましょう。それがすぐには信じられず、自分の目で確かめたかったのでありましょう。

(3) 釈迦牟尼世尊の答え

パセーナディ王の直截な質問に対して、釈迦牟尼世尊も、「この世で、最高の正等覚を悟った者がいるとすれば、それは私である」と、ずばりと答えられました。

自分は、正等覚者であると、自ら宣言したのです。

(4) 正等覚者の宣言

釈迦牟尼世尊が「自分は正等覚者である」と宣言なさった場面が、ほかにもあります。

① ウパカに向かって

成道の直後、ウルヴェーラー（優樓頻螺）から、バーラーナシー（波羅捺）に向かいましたが、その途中、邪命外道のウパカ（優波迦）に出会いました。

このとき、釈迦牟尼世尊は、ウパカの質問に答えて、「自分は正等覚者である」と宣言しています。（増谷文雄編訳『阿含経典3』ちくま学芸文庫、p. 144～145）

② 五人の比丘に向かって

釈迦牟尼世尊が、バーラーナシーのイシバタヤ・ミダガーヤ（仙人住所・鹿野苑）に、五人の修行者を訪ねました。このとき、比丘たちは、釈迦牟尼世尊に向かって「友よ」と話しかけました。この場合の「友」とは、修行者同士が互いに相手と呼ぶ言葉です。

これに対して、釈迦牟尼世尊は、次のように述べておられます。

「比丘たちよ、如来を呼ぶに《友》の語を用いるなかれ。比丘たちよ、私は応供・正等覚者である」（増谷文雄編訳『阿含経典3』ちくま学芸文庫、p. 149）

このあと、初転法輪が行われました。

(5) 正等覚者の自覚

経文「如来所説」には、釈迦牟尼世尊が「自分は最高の正等覚を悟りえた」と自覚するまでの経緯が、語られています。（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 287）

(6) 正等覚者の宣言について

庭野日敬師は、釈迦牟尼世尊による正等覚者の宣言について、次のように述べておられます。

「ほかのどんな人が、ほかのどんな道においても、このような宣言をしたとしたら、増上慢の匂いがプンプンすることでしょう。けれども、ただ仏陀の自覚だけは、凡夫の頭ではとうてい、うかがいしれぬものです。自他の差別をのぞきつくし、天地一切のものを自分のふところに抱きとるものであるという自覚ですから、『われこそ仏陀なり』と確信し、それを宣言しなければ、かえってうそになります。仏陀の自覚というものは、世法の俗な考え方からははるかに隔絶した、天地一切のものと一体となる無我の境地なのであります」

（庭野日敬著『新釈法華三部経7』佼成出版社、p. 27～28）

4. 六師外道

(1) 経文「若しとて」

「だが、ゴータマ（瞿曇）よ、世にはサンガ（僧伽）をもち、ガナ（衆）をもち、ガナの師にして、有名にして名声があり、救済者にして、多くの人々に善き人として承認せられる沙門や婆羅門がある。たとえば、

プラーナ・カッサパ（富蘭那迦葉）、
マッカリ・ゴースーラ（末迦梨瞿舍羅）、
ニガンタ・ナータプッタ（尼乾陀若提子）、
サンジャヤ・ベーラティプッタ（刪闍耶吠羅底子）、
カクダ・カッチャーヤナ（迦攞陀迦旃延）、
アジタ・ケーサカンバラ（阿耆多翅舍欽婆羅）

がそれである。

だが、彼らにしても、なお、汝は最高の正等覚を悟れりやと問われるれば、われは最高の正等覚を悟れりとは宣言しない。ましていわんや、ゴータマよ、あなたは、なお年若く、出家してまだ日も浅いではないか」（同書、p. 381～382）

(2) 六師外道

当時、インドには多くの思想家が排出し、活動したそうですが、そのなかでもとくに著名な思想家が7人いたそうです。それが、ここに上げられている6人と、釈迦牟尼世尊です。

この6人は、仏教の立場から、六師外道と呼ばれています。

パセーナディ王は、六師外道に直接会って、一人一人に、「あなたは最高の正等覚を悟りましたか」と質問したのでしょうか。けれども、自分は正等覚を悟ったと答えた人は、誰一人として、いなかったのでしょうか。

(3) 六師外道の所説

六師外道の所説については、増谷文雄編訳『阿含經典3』（ちくま学芸文庫）の「六師外道のことも その一、その二」をご参照ください。

正直なところ、これらの所説は、私にはよく理解できませんでした。

(4) 釈迦牟尼世尊

釈迦牟尼世尊が当時50歳ぐらいただとすれば、6人の老齢の指導者たちに比べて、はるかに年若かったのでしょうか。そのため、パセーナディ王は、こんなに若い男が、最高の正等覚を悟ったはずがないと思ったのでありましょう。

5. 若いからといって軽蔑してはならない

(1) 経文「若しとて」

「大王よ、若いからといって軽蔑してはならない。世には若いからといって軽蔑してはならないものが四つある。その四つとは何であろうか。

大王よ、クシャトリヤ（刹帝利）は若いからといって軽蔑してはならない。小さいからといって軽蔑してはならない。

大王よ、蛇は若いからといって軽蔑してはならない。小さいからといって軽蔑してはならない。

また大王よ、火は若いからといって軽蔑してはならない。小さいからといって軽蔑してはならない。

そして、大王よ、比丘は若いからといって軽蔑してはならない。小さいからといって軽蔑してはならない。

大王よ、これらの四つのものは、若いからといって軽蔑してはならない。小さいからといって軽蔑してはならない」

世尊はそういった。（同書、p. 382～383）

(2) 若いからといって軽蔑してはならない

釈迦牟尼世尊は、若いからといって軽蔑してはならないものを、四つ上げました。

クシャトリヤ（刹帝利）、蛇、火、比丘の四つです。

クシャトリヤとは、武力や政治力を持つ人びとです。暗に、パセーナディ王を指しているのでありましょう。

比丘は出家修行者です。釈迦牟尼世尊は比丘の一人です。

6. 軽蔑してはならない理由

釈迦牟尼世尊は、この四つを軽蔑してはならない理由を偈で示します。

若きクシャトリヤを軽蔑すると、このクシャトリヤが長じて権力者になったとき、かつて軽蔑されたことを思い出し、怒りを覚えて、罪を加えられることがあるかもしれません。

小さな蛇を軽蔑して近づくと、噛まれて、生命に危険が及ぶこともあります。

小さな火を軽蔑していると、燃えるものを得て燃え上がり、焼かれることもあり得ます。

比丘が若いからといって軽蔑していると、実はすでに悟りを得ている聖者であるかもしれません。聖者を軽蔑することは、自ら、救われの道を閉ざしてしまうことになります。

いずれも、軽蔑すると、自分の生命や人生にマイナスが生じる可能性があるわけです。

7. パセーナディ王の帰依

(1) 経文「若しとて」

かように語られたとき、コーサラ国の王パセーナディは、世尊にいった。

「すばらしいかな、世尊、すばらしいかな、世尊。たとえば倒れたるを起すがごとく、覆われたるを露わすがごとく、迷えるものに道を示すがごとく、暗闇のなかに燈火をもたらし、〈眼あるものは見よ〉というがごとく、かくのごとく世尊は、さまざまの方便をもって法をあらわし示したもうた。わたしは、ここに、世尊に帰依したてまつり、また法と比丘衆とに帰依したてまつる。世尊よ、願わくは、わたしを在家の信者として納れたまわんことを。わたしは今日よりはじめて命終るまで帰依いたします」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 386)

(2) パセーナディ王の帰依

- ① 釈迦牟尼世尊に対して、居丈高に詰問したパセーナディ王でしたが、いまや、在家の信者として受け入れてくださいとお願いしています。
- ② パセーナディ王が、長老たる六師外道に質問したときは、パセーナディ王の質問に答えるというよりは、それぞれに自分の説を主張するばかりだったにちがいありません。そのため、納得のいく答えにはなっていなかったのだと思います。
- ③ 釈迦牟尼世尊は、自分の質問に正面から答えてくれた上に、その内容が素晴らしく、また、納得のいくものでした。パセーナディ王は、すっかり感激したのでありましょう。

8. 在家者の目覚めの定型句

この経文は、在家者が目覚めたときに、感動と共に表白する定型句です。これについて、増谷文雄博士の解説があります。

(1) 倒れたるを起すがごとく

「その第一は、『倒れたるを起すがごとく』である。転倒して真相を失するを救うのである」
(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 114)

- ① 「倒れる」とは、転倒することです。身体が転倒するわけではありません。心が転倒するのです。ものごとの見方が転倒するのです。ものごとを逆さまに見てしまって、真相を見失ってしまうのです。
- ② ものごとを逆さまに見てしまうと、行ないも逆さまになってしまいます。幸せを求めながら、不幸せへの道を歩んでしまいます。
- ③ ものごとを逆さまに見て、真相を見失ってしまった人々に対して、釈迦牟尼世尊は教えを説き、正しいもの見かたに導いてくださるのです。倒れた心を起してくださるのです。

(2) 覆われたるを露わすがごとく

「その第二は、『覆われたるを露わすがごとく』である。その説くところには、不思議もなく、秘密もないのである」（同書、p.114）

① 当時の宗教者や思想家たちは、一般の人びとには理解することができない不思議な教えを説いたようです。また、一般の人々には説かない秘密の教えもあったようです。

すなわち、一般の人々から見れば、教えは覆われていたのです。

② 釈迦牟尼世尊は、筋道の立った分かりやすい教えを説きました。また、釈迦牟尼世尊は、すべての人にすべてを説きました。

釈迦牟尼世尊は、教えの覆いを取り払って、真実を露わになさったのです。

(3) 迷えるものに道を示すがごとく

「その第三は、『迷えるものに道を示すがごとく』である。迷妄をしりぞけ、妄想を克服するのが、その説法のありようであった」（同書、p.114）

① 「迷い」とは、本当のことが分からなくなっている状態です。

「迷妄（めいもう）」とは、ものごとの筋道や法則が分からない状態です。

「妄想（もうぞう）」とは、真実でないものを真実であると考えことです。

② 釈迦牟尼世尊は、ものごとの正しいすじみち、正しい法則を説いて迷妄を除きます。また、ものごとのありのままのすがたを示し妄想を除きます。こうして、迷いを払拭するのです。

(4) 暗闇のなかに燈火をもたらし、〈眼あるものは見よ〉というがごとく

「その第四は、『暗闇のなかに燈火をもたらし、〈眼あるものは見よ〉というがごとく』である。これこそ、釈尊の説法の特徴をもっとも具体的に語りえたことばであるということをするであろう。

それを後来の仏教者たちは、しばしば『明來闇去（みんらいあんこ）』と語ったこともあった。燈火をかかげて、暗闇の部屋のなかに入る。すると闇はたちまちにして逃げ去ってしまう。そのように、智慧の光の来るところ、無智無明はたちまちに去ってしまう」（同書、p.114～115）

① 「暗闇」は「無智・無明」、「燈火」は「智慧」を表していると思います。

釈迦牟尼世尊は、無智・無明の人を導いて智慧を得させます。

「眼」とは、智慧の眼です。「眼あるものは見よ」とは、智慧の眼を開いて、真実を見てくださいということでありましょう。

② 無智・無明の暗闇であった自分の中に、釈迦牟尼世尊の教えという燈火が持ち込まれて、智慧ある人になることができれば、たちまち、人生の大転換がなされるにちがいありません。

これこそ、釈迦牟尼世尊の説法の目的であったにちがいありません。